

ソウル高層集合住宅の展開とアパート暮らし

NAM Kun-Woo
南 根祐

東國大學校

(訳：中村和代)

1. はじめに

韓国では、よく積層の集合住宅を「アパート」と言う。日本の「マンション」や中国の「公寓」に相当し、大体5、6階以上の共同住宅を指し呼んでいる。高層集合住宅が群を成し一つの地区となった「アパート団地」を、「故郷」と思う人がソウルには少なくない。アパートで生まれ、団地内の遊び場や学校で幼年期を過ごした者、そして大人になってもアパートのために奔走しながら年を重ね、人生を終える者が多数存在するからである。今春、ソウル歴史博物館が「アパート人生」という企画展の開催に至ったのも、このような現状と無関係ではないと考える。その展示資料によれば、2014年3月現在ソウル市内のすべての住宅の中で、アパートが占める割合は58.9%であり⁽¹⁾、今後購入を希望する住宅では、アパートが占める割合が71.6%にもなる。喜怒哀楽の人生は、アパートとともに過ごしたいと思う者が、軽く半数を越えているのだ。

「アパート人生」を生きていくのは、もちろんソウルの人々だけではない。韓国でアパートの普及率が最も高い都市は光州であり、その次に蔚山、大田、大邱、釜山、仁川の順で、ソウルは韓国の七大都市の中で、最下位だ。最近では都市だけでなく、農村や漁村地域のアパート居住人口も加速的に増えている。地方の邑や面（韓国の行政区画）でも、高層のアパートが立ち並んでいない場所は珍しいほどである。その姿は「田の畦アパート」や「畑の畦アパート」と呼ばれ、周辺の外観や風光を壊す殺風景な景色を作り出している。

ならば、韓国はどのようにして高層集合住宅だらけの「アパートの国」になったのだろうか。西欧と異なり、韓国社会では何故中間層はもちろん上流層までもアパート暮らしを好むのだろうか。ソウル市民の7割以上がアパート生活を夢み、より広く高価な高層集合住宅を欲する理由は何なのか。そして、アパートという暮らしの場で、日常生活は実際どのように営まれているのだろうか。それは、従来の「伝統的」な生活様式とどのような連続、あるいは不連続の関係を持っているのだろうか。

本稿では、このいくつかの問いを研究課題として取り上げることにする。ただ、現在まで韓国の民俗学研究は、目の前に広がる高層集合住宅とアパート暮らしの日常を対象化したことがなかった。したがって、隣接学問の研究成果などを援用しながら⁽²⁾、今まさに始動した若干のアパート調査と20余年にわたる筆者自身のアパート暮らしの経験を生かし、本論を進めていこうと思う。

2. 「アパート共和国」の誕生

韓国で人々が高層集合住宅に住み始めたのは、1950年代後半の頃だ。一般的には1958年に大韓住宅営団がソウル市城北区鐘岩洞に建てた鐘岩アパート3棟が、その嚆矢として知られている。以降、数十年間全国をアパートで埋めてきた韓国社会は、名実ともに「アパート共和国(The Republic of Apartments)」⁽³⁾ になったと言っても過言ではない。

その形成過程を概観すると、高層集合住宅の画期的な転機は1960年代初頭に到来する。クーデターにより発足した朴正熙政権が「経済開発五カ年計画」を開始した頃だった。慢性的な住宅難の解消を「経済開発」の一環としてみなし、住宅政策を積極的に展開したのだが、その担い手は大韓住宅営団を拡大、改編した大韓住宅公社だった。韓国の場合、西欧のような社会住宅や永久的な賃貸住宅の供給が困難だと判断した軍事政権は、企業的な方式をもって住宅建設事業を推進する目的で公社を設立した。韓国の住宅政策が、社会福祉の次元ではなく建設産業の一環として始まった所以である [林 2005:40-43]。

この大韓住宅公社が、野心的に提供した初めての作品が麻浦アパートだ。韓国初の団地型アパートで、住居文化の近代化を期待し1962年に麻浦区桃花洞に建てられた10棟の共同住宅だった。当時竣工式に参加した朴大統領は、「旧来の姑息的で封建的な生活様式から脱皮し、現代的な集団生活様式を構える」ことのできる、「生活革命の象徴が、まさに麻浦アパート」[大韓住宅公社 2002:38] と、その歴史的意義を強調した。実際、麻浦アパートには世帯別に練炭ボイラーを使用する暖房設備と水洗式トイレが初めて備えられ、立式生活を志向する西欧の暮らし方を披露していた。また、広い敷地の上に6階建てで建てられたこのアパートは、多くのオープンスペースを確保し、緑地の上の高層住居として豊かな日差しと風、土地を効率的に利用する集合住宅の理想的な実現を目指していた [田ほか 2008:193-195]。

しかし、このような大韓住宅公社の期待とは裏腹に、集合住宅に対する人気が高かったわけではなかった。麻浦アパートをはじめ、当時のアパートは、大抵10坪未満で貧民窟のイメージが強く、また練炭ガス事故に対する不安や、アパート暮らしの物質的、技術的な所与の条件から生じる違和感が少なくなかったからだ。さらに、五カ年計画で1968年に着手した京畿道「広州大団地造成事業」の霧散と、1970年4月8日に発生した麻浦区倉前洞(現西江洞)の臥牛アパート崩壊事故は、アパートに対する否定的な認識を拡散させる起爆剤になった。

これにより、政府は庶民層ではなく中間層を中心とするアパート団地の建設へと、そのターゲットと方向の転換をはじめた。1971年に漢江の川辺に位置する東部二村洞に建てられた漢江アパートは、いわゆる近隣住区(neighborhood unit)理論に基づく大規模な団地として、10年後に漢江の南側地域に大量に立ち並ぶ高層アパート団地の先駆的な姿だった。ちょうど同時期に発表された江南開発計画は、大団地アパート建設をさらに煽り、盤浦アパートと蚕室アパートをはじめとする超大型アパート団地が漢江に沿って雨後の筍のごとく出現した。大韓住宅公社が造成したこれらアパート団地の人気が発火しながら、民間企業のアパート建設参入も本格化しはじめた。1970年代後半、(株)現代建設が江南区鴨鳴亭に建てた現代アパートがその代表的な団地として、

最も小さいもので 35 坪大きいものでは 60 坪にもなり、すでに中間層アパートの範疇を越えていた。

70 年代中盤から後半以降、政府の住宅政策と建設会社の利益創出、そして新興中間層の住宅需要などが噛み合わさりながら、高層アパートが江南の代表的な住居様式として次第に根付いていった。そして、ソウルオリンピック直後、盧泰愚政権が推進した住宅 200 万戸建設計画は、ソウル市全体と首都圏一帯、さらには全国地方都市をアパートだらけにした決定的な契機として作用した。その間に、アパートに対する世間の認識も大きく変化し、1993 年を起点に高層集合住宅は選好度で単独住宅を上回るようになった [康ほか 1997:104-105]。

このように短期間に、しかも大規模なアパート団地が普及、拡散された背景と原因については、実に多様な見解が提示されている。例えば、狭い国土と人口過密、核家族化、世代変化、女権伸張、中間層の成長、都市化と郊外化、高層集合住宅中心の住宅政策、民間アパート建設の高い収益率などだ。これらの中には原因と結果を取り混ぜている見解も少なくないのだが、「アパート共和国」誕生の要因を大まかに整理すると、次の二つにまとめることができる。一つは、供給の面で高層集合住宅を大量に建設したということであり、もう一つは需要の面で数多くの人々がそのアパート団地を選好したということだ。

まず、供給の面から見ると、アパート建設は軍事政権、文民政権を問わず、政府の住宅政策の根幹だった。韓国のアパートは、「まるでマッチ箱のようだ」という批判にもかかわらず、長い間最も効率的な住宅供給方式だったという事実は否定し難い。高層化と高密度化をとめない、小さな土地の上に住宅の大量生産が可能だからだ。いわゆる「マッチ箱アパート」は、時代ならではの理由があった。速く、安く、住宅を供給しようとするならば、アパートを規格化する方式が経済的に有利だ。設計を再び行う必要がなく、団地造成に必要な設備と資材を、各建設現場で共有することもでき、費用が少なく設定できる方法だった。大韓住宅公社は、1982 年から、「住宅基本設計」を毎年発刊したのだが、これをもとにアパートを文字どおり「型押しして作った。」その後、2008 年にソウル市が「デザインソウル」を標榜しながら、いわゆる「フォーディズム (fordism)」スタイルの住宅供給時代が幕を下ろし、「マッチ箱アパート」はその歴史的な役目を終えることとなった [田 2009:47-49]。

3. アパート団地を選好する理由

高層集合住宅に対する批判は、以前も現在と変わらず激しいものだった。それは、市民の生き方を画一化し、都市の環境を攪乱させる主犯だということが、建築専門家の共通した主張だった。しかしこのような主張は、ソウルの住宅事情の現実とはかけ離れたものだった。1970 年代中盤から徐々に始まったアパート人気は、ソウルオリンピックを前後しながら天高く上り、アパート暮らしを選好する人々の数は爆発的に増えていった。

その主な要因の一つとして、アパート団地が持つ住宅環境の優位を挙げることができる。アパートが人気を独占できたのは、「団地」として開発されたからであり、その背景には韓国の都市空間の環境がとてつもなく劣悪だったという事情が存在する。7、80 年代の輸出増大と経済成長の総力戦

に突進した韓国の場合、増加の加速する住宅需要に対応できるだけの住宅供給政策を打ち出すことが、容易ではなかった。都市環境は劣悪な状態で放置されたまま、住環境に対する市民の要求は高まる一方であり、このジレンマを抜け出すことのできる脱出口が「アパート団地」だった。都市環境に対する大規模な投資がなくとも、団地別に緑地、子供の遊び場、駐車場、その他便宜施設などを備えた非常に結構な「町内と家」を作り出すことができたからだ。

実際、単独住宅地区に比べ、アパート団地はまさに別天地だ。夕方になる度に繰り広げなければならない「駐車戦争」を避けることができ、場所場所に緑地帯と子供の遊び場が1、2カ所ずつ備わっている。最近では、スポーツセンターやプール、読書室など、いわゆるコミュニティー施設がすべて備わった団地へと進化している。何より、高層住居棟は隣の棟との間隔に合わせた幅広い外部空間が、一般住宅地域では考えられない開放的な空間への欲求を満たしていた。このような団地の魅力こそ、アパートが人気を得るようになった核心的な要因であり、言わばアパート団地は、劣悪な都市公共空間の環境の中に存在する、私設オアシスというわけだ〔朴 2013:18-24〕。

またもう一つの要因として、アパートが富の源泉であり「財テク」の手段だったという点が大きいの。韓国は、よく「家一軒が財産のすべて」と言うほど、住宅の所有に対する執着が非常に強い社会だ。少なくとも「家一軒は、子供に譲り渡さなければ」という思いが、澎湃と起こる国なのだ。このように、「家一軒」の意味が重大な状況の中で、アパートの価格が単独住宅のそれを桁外れに上回るならば⁽⁴⁾、だれもアパートの所有に積極的にならざるを得ず、アパートの選好は、選択ではなく必須となる蓋然性がとても高い。実際、ソウルオリンピック開催を前後し、ソウル市内のアパート価格は跳ね上がった。一般的に景気好調で全国民の実質所得が急増し、資産の流動性が極大化していた時だったからだ。そして1997年、IMFの救済金融以降にはアパート価格の空間的両極化が深化し、自家所有層内部の階層分化が大幅に拡大された。同じ種類、同じ大きさのアパートでも、その位置によって価格が大きく違ったのである。

この過程で富者となった者の中には、アパートで儲けたケースが多かった。いわゆる「不動産不敗神話」が継続しながら、アパートが最も普遍的な財テクの手段になったからだ。もちろん政府が数十回にわたり様々な不動産対策を打ち出したが、不動産市場の耐性だけ育てたまま大抵は失敗に終わった。その間、人々は非人気地域から「バブルセブン」⁽⁵⁾などの人気地域へ、小さな坪数から大きな坪数へ、いわゆる「のりかえ」を続けながら財産を増やしていったのだ。アパートから表札が消えたのも、これと無関係ではないだろう。表札の消失は、個人の機密や私生活を保護するためというよりは、頻繁に引っ越しを繰り返す習慣的な行動から現実的な理由を見つけなければならない⁽⁶⁾。ソウルの人々にとって、財テク手段の性格が強いアパートは、証券市場の優良株のように随時売り買いする対象だからだ〔全 2007:91-93〕。

ソウルのアパートは、社会的身分のシンボルとして機能する傾向が強い。周知のとおり、西欧では単独住宅中心の上流層住居文化を郊外に定着させた。反対に、韓国の中間層と上流層は主に都心内部のアパート団地、ソウルの場合は特に江南地域の高級な雰囲気漂う団地で、自分たちなりの住居文化を生成、発展させてきた。韓国では「江南のアパートに住む」と言う時、それは一種の「記号の消費」であり、その高価な団地での居住は社会的支配階級による一種の「区別付

け (distinction)] 行為と見ることができる [全 2009:67-70]。そのような空間的差異化の過程から、アパートの位置と坪数に強く執着する住宅の過消費現象が現れることは言うまでもなく、そのハイライトが江南区道谷洞のタワーパレスに象徴される最近のブランドアパートの登場である。

4. 高層集合住宅の土着化とアパート暮らし

地球上のすべての家は、人間の生活を制約し規定するが、その家はすべて人々が作るものだ。人々の生活様式と住居文化に合わせ、暮らしの場が作られるのだ。高層集合住宅もやはり例外ではないだろう。60余年前、ヨーロッパの高層集合住宅のモデルを取り入れたアパートは、当然韓国の伝統的な生活様式ではない。にもかかわらず、韓国人の大半が「アパート人生」を送っているのは、その高層集合住宅が、絶えず土着化の道を歩いてきたからだろう。

韓国的土着化の姿としては、まずアパートの平面構成から見つけることができる。具体的には、図1の4部屋からなる平面図を見ると居室が中心に位置し、そこを囲みながら4つの部屋と厨房、食堂、玄関、浴室が配置されている。いわゆる4LDKアパートの典型的な仕切りだ。3部屋からなるアパートも、やはり部屋のある一方に玄関と階段室が位置するだけで、同一の構成だ。西洋や日本のアパートと比較して見ると、その特徴がはっきりと現れる。西洋のアパートは、家族の共同空間であるリビングルームとダイニングルーム、キッチンと、個人空間であるベッドルームと領域的に区分し構成するのが一般的だ。日本のアパートの場合は、全面の幅が狭く長い平面形態の中で、居間と部屋が内部の廊下でつながっている場合が多い。これに比べ、韓国のアパートは、大抵家族の共同空間と個人空間の領域的区分がはっきり区切られているわけではなく、居室を他の空間が囲んでいる。

韓国のアパートのこのような空間構成は、主に1930年代に建てられた都市型韓屋⁽⁷⁾をモデルとしたことで知られている。図2に見られるように、通りから大門を開け入ればすぐに内庭^{マダン}へとつながり、そこから内房^{アンバン}、大庁^{マニル}、コンノンバン（内房の真向かいにある部屋）、台所、門間房（大門の横にある部屋）、便所などへ行ける改良韓屋の動線形式が再現された。中心にある内庭を居室に変えれば、アパート平面図とたいして変わらないことがわかるだろう [서 2007:115-117]。居室を通じて採光することはないが、すべての部屋で居室の広い開放感を感じられることや、居室がすべての部屋をつなげる動線空間の役割をなすことは、都市型韓屋の内庭と同じだ。より広く、涼しい空間に対する要求が、都市型韓屋からアパートへ続いているのである。

もちろんこのような居室中心の平面構成が、高層集合住宅を導入した初期から一般化したのではない。韓国のアパートも、やはり最初は図2の「1960年代ヨーロッパ式アパート」のような居室領域と寝室領域を区分しようと設計されていた。しかしそのうちに、アパートが増えながら1970年代中盤以降、居室を寝室が囲む様式が次第に占めるようになった。アパート需要者たちが、領域分離型より居室中心型構成を選好したからだ。前者より後者が、住まいを広く明るく見せる効果があることは言うまでもない。要するに韓国アパートの最も大きい特徴は、居室中心の開放的空間構成であり、それは在来の都市型韓屋⁽⁷⁾と西洋のアパートの仕切りがお互い衝突し、融合し、成立した結果なのである [朴 2013:196-200]。



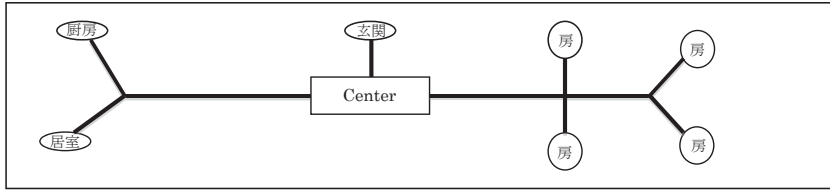
図1 3室型と4室型平面図（間取り）

韓国では、家族構成員たちを、よく「^{シッコク}食口」と言う。一つの家で、一緒に暮らしながら食事とともにする人という意味だ。個々人の私生活よりは、「食口」の意思疏通と融合を優先視するのが、韓国の家族主義文化であり、それが反映されたのが上記の居室中心型空間構成だと見ることができる。例えば、アパートに住む韓国人で、幼い時に両親から次のような言葉を1、2回でも聞いたことのない者はいないだろう。「部屋へ閉じこもっていないで、^{マール}居室へ出てきなさい」や、「^{マール}居室から部屋が見えるからって、なんだ。見て悪いものでもあるのか。そんなに気になるのならドアを閉めるなどしろ。」のような言葉だ。しかしその後「ドアを閉めてもうるさくて勉強にならないだと。ああ、わかった。テレビを消せばいいだろう。」とアパートの^{マール}居室でニュースを見ていた父親やドラマを見ていた母親の主張は覆る。「この子の勉強のほうが重要だろ。テレビを見るのがなんだ、たいしたことか。」このような家庭内の日常的な会話は、家族構成員たちの趣味生活やプライバシーより、子供の大学入試という一大事がかかった「勉強」のような「家庭内の大義」が優先であることをよく表している⁽⁸⁾。この韓国的家族主義文化の背景と原因については今後精緻な議論が必要だが、その「開かれた」^{マール}居室で食口たちと調和しやすい住まいが、韓国のアパートであることだけははっきりと認識できる。

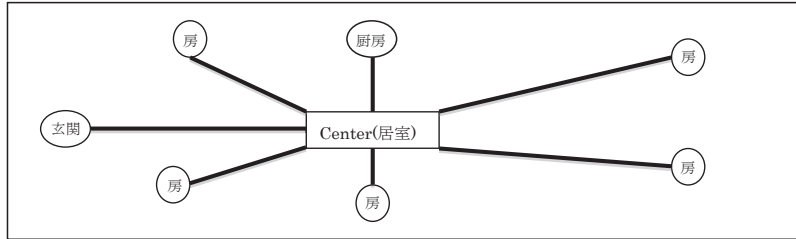
次に、^{オンドル}温突の暖房装置も、やはり韓国的土着化を示す好例の一つだ。よく知られているとおり、温突暖房はアパートへの導入初期から大きな論争となる問題だった。高層集合住宅に設置することは技術的にさほど難しいことではなかったが、西欧の暮らし方を洗練された生活様式として思う風潮が強かったからである。例えば、汲み取り式トイレと竈のある^{アオク}鼎厨（台所）は、廃する対象だった。非合理的であり、非衛生的な暮らしの代名詞で、これらを代替する水洗式トイレと立式の台所が、現代的な住居生活の表象だった。そのような状況で竈のある台所とつながっている温突も、当然取り除かれなければならないものだったが、事情はそんなに単純ではなかった。人々は「清潔な」水洗式トイレと立式の台所は比較的すんなりと受け入れながらも、「ぼかぼかする」温突暖房だけはずっと維持することを希望したからである。

具体的には、麻浦アパートの場合、もともと温突部屋のない中央集中式暖房でラジエーターを設置する計画だった。しかし紆余曲折の後、世帯別の練炭ボイラー方式で居室にはラジエーターを立て、各部屋には温水コイルを床に敷き温突を設置することに変更した。中央暖房システムが実現された漢江アパートでは、温突部屋なく家全体にラジエーターを設置しており、盤浦1団地

1960年代 ヨーロッパ式アパート



1990年代 韓国式アパート



1930年代 改良韓屋

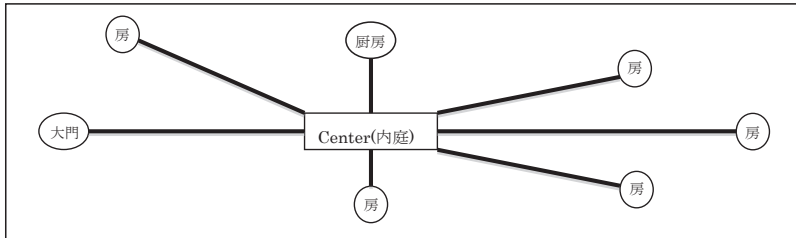


図2 アパートと韓屋の動線比較

の場合は、内房だけ温突を敷き、残りの部屋と居室はすべてラジエーター暖房にした。しかし、居住者たちが依然として温突部屋を選好すると、後には中央暖房システムの団地でも、内房だけでなくすべての寝室を温突部屋にし、残りの部分だけラジエーター暖房を並行する方式が一時続いた。このような韓洋折衷の暖房方式は、中・大型アパートで1980年代初期まで持続され、80年代後半からは家全体に温突を敷くのが普遍化した [朴 2013:211-212]。

このように高層集合住宅に温突を接いだ韓国のアパート暮らしの独特さは、起居様式でも見つけることができる。韓国のすべてのアパートは立式の台所を備えており、また大抵の家が食卓や机、ソファ、ベッドなどを使用している。アパート生活者たちの起居スタイルは、もう古来の床へ直座りではなく、立式へと向かわなければならない状況になったのだ。しかし、韓国のアパートに立式の家具がたくさん置かれているからといって、座式生活が消えたのではない。食口全員が、食卓をぐるりと囲み食事をする時、その食卓の下を見てみると、多分一人二人は、椅子の上で片足を立てて座ったり、あぐらをかいていたりするだろう。また食卓での食事後は、居室の床に座りテレビを見ながらデザートを口に運び一家団らんを楽しむのも、よく目にする日常の姿だ。あるいは、食卓ではなくお膳を用意し居室や各部屋で食事をしたり、居室の床で茶の接待をする場合も少なくない。

さらには、居室のソファに座ってテレビを見る韓国の男たち、特にオジサンたちの姿を、一度想像してみよう。2、30分後にはソファに頭をもたれて、暖かい居室の床に体半分投げ出し横たわる彼らの姿が、容易に目に浮かぶ。そうするうち、片手で頭を支え寝転んでテレビを見ているかと思えば、いつのまにか起き上がりソファにもたれ座っていたりする。このように、居室のソファと床の間を座ったり寝そべったり繰り返す者たちが、韓国では実に多い。「ほかほかする竈近くの床で、背を炙りたい」と思う韓国人の習性が、それとなく現れたもので、近年流行しているチムジルバン（服を着たままくつろぐサウナ）でゴロゴロする様子も、やはりこれと無関係ではないだろう。要するに、韓国のアパート暮らしは、座式生活の持続の中に立式生活の便利さが融合されたものであり、異種混交的な起居を可能にさせる基盤が、温突暖房に他ならない。

このような伝統と現代の折衷、あるいは韓国的なものど西欧的なものの混成は、上記にあげた2つに留まらない。例えば、浴室に浴槽やシャワーがあってもプラスチックの湯桶を使う場合がととても多いことや、多用途室⁽⁹⁾で洗濯機と一緒に洗濯板を使っている様子などだ。また、内房に固い石製のベッドを置いたりベッドに電気敷布団を敷いて寝たり、ひいてはベッドを置いていても床に寝具を敷いて寝る人もいる。そして、バルコニーに置かれた醬甕^{チヤンドク}や鉢植えや、昔のキムチ甕を現代化させたキムチ冷蔵庫、最近では井の模様の天井や垂木スタイルの天井に至るまで、韓国的土着化の姿は程度の差はあっても高層集合住宅^{アパート}のあちこちで見発見することができる。

ところで、韓国のアパートは土着化を追求すると同時に、現代韓国社会の構造変化にも素早く適応してきた。アパート空間の家族政治がそれをよく示している。周知のとおり朝鮮時代の韓屋は、性理学的社会秩序を空間的に再現していた。そして女性空間と男性空間に大別されるその内部空間において、最上はやはり舎廊^{ヤラン}だった。それは、家全体を管掌する一種のパノプティコンであり、外部へ開かれた政治的、文化的空間だった[南 1996:85-89]。もちろん実生活の機能的な面で、舎廊^{ヤラン}が母屋^{アンチェ}よりももっと重要だったということではないが、韓屋はジェンダーや世代の側面から見た時、舎廊の成人男性がその中心であった。家父長的権力構造を再生産する空間が、まさに舎廊に象徴される両班^{ヤンバン}の韓屋だったのである [金 2005:17]。

わずか数十年ほど前までは、韓国の単独住宅では同じ部屋の中でさえ、男性と女性の空間上の分離が明らかだった。6、70年代を背景にしたホームドラマでよく目にすることができるように、広間^{アンバン}一つに内と外という仮想のラインで境界付け、「父の空間」と「母の空間」として厳格に区分されていた。前者は、文机を中心に本やラジオ、新聞、印章などが置かれた「秩序空間」であり、後者は、食堂、居室、応接室、簡易トイレ^{ヨソトイレ}などすべての機能を遂行できる「万能空間」だった。このような空間区画の姿は、家の中の情報収集権と分析権、および意思決定権などが、妻ではない夫に偏重していたことをよく見せている [全 2003:23-28]。

これに比べ、高層集合住宅^{アパート}の内部空間は、家族成員間のより平等な社会関係を志向している。この点では、韓国のアパートはジェンダーや世代と関連した韓国社会の変化に対し、比較的上手に対応してきたと認識できる。まず目立ったものは、成人男性空間の縮小だ。男性の専用空間だった舎廊が接待と家族団らんの場である居室へ吸収され、内房が夫婦共用の空間へ変わった。そして、韓屋をはじめとする単独住宅の座式生活がアパートの立式生活へ変わったことも、両性平等

の視点からは歓迎すべきことだ。以前は、人が留まり、食事の膳や茶器などが移動した。それらを動かすのは大抵女性の役割で、自然に男性が女性の主人となった。しかしアパート暮らしでは、ソファや食卓、椅子のような「身体家具」が日常化し、結果的にこれらがやはりフェミニズム効果を発揮するようになった。男性もまた、身体家具を利用する時自ら移動しなければならなくなり、身体家具の前では家族構成員が皆老若男女問わず相対的に対等なのだ [田 2002:7-9]。

住まいの内部空間で、性的不平等の減少を劇的に表している場所は、他でもなく台所である。韓屋や単独住宅で女性が調理していた空間は、位置や大きさの面で大変劣勢だった。韓屋の台所は地面を掘って作り、大抵庭の高さより一、二尺ほど低かった。また、外から風が吹いて来ると、埃が食べ物に入らないようにしなければならなかった。下はわざとでこぼこに作った。その後、1970年代初頭、台所はアパート暮らしで「^{チュバン}厨房」へ昇格した。立式で設計され、住宅内の他の空間と遂に高さと同じになったのだ。同時に暖房が分離され、厨房は炊事専用空間になり、汲排水が合わさった流し台も普及した。以前は雑然としていた台所が、実験室のように整理され、食事空間もそれぞれ分離された。結果的に、台所もまた住まいで引けをとらない内部空間の一つとして、位置を占めるようになった [咸 2005:54-60]。「男が台所に入ればおちんちんがもげる」と言い伝えられてきた禁断の台所で食事しようとするならば、その誰もが厨房へ足を向けなければならない、比較的平等で開かれた空間になったのである。

5. おわりに

以上、大まかではあるがソウルの高層集合住宅の展開過程を概観し、韓国人が選好する理由を分析してみた。そして、高層集合住宅が韓国的アパートへ土着化する様相と、アパート暮らしという日常生活の一端を考察した。

韓国の高層集合住宅の将来に関し、フランスの地理学者パレリ・ジュレゾの見解は、否定的なものであった。ジュレゾは、特にソウルの高級アパート団地がやがて各種都市問題の温床になるだろうと予想し、都市の中間層も高層集合住宅がこれ以上彼らの「^{アパ}区別付け」を後押しすることはできないという確信を持った瞬間、それを未練なく捨てるだろうと述べている [슬레즈 2004:262-263]。

果たして、そうだろうか。私は、そのような可能性はさほどないだろうと考えている。韓国のアパートは、大体が自家所有形態であるので、財産としての経済的価値が下落する状況がそのまま放置されるわけではないからだ。昨年9月1日、政府が発表したアパート対策、すなわち「規制合理化を通じた住宅市場の活力回復および庶民の住宅安定強化法案」が、その端的な例である。また、狭い国土に人口密度が高い韓国の場合、土地利用の効率性を続けて掲げなければならない立場であるため、都心のスラム化を手をこまねいて待つ余裕はない。再建築やリモデリングなど、土地利用のリサイクル期間を短くせざるを得ないからだ。実際、韓国のアパート交替寿命は27年に過ぎない。英国は128年、アメリカは72年、日本は54年などに比べ、その寿命が四分の一ないし二分の一である（日刊紙マネー투데이 2014年9月3日）。

韓国の人々は、まだ高層集合住宅に飢えている。そこは、経済的な付加価値や社会的次元で、す

でに最高に人気ある住居空間としての地位を確立している。収益性や安全性、換金性、差異性が抜きん出ているからである。さらには、人口の停滞ないし減少、高齢化時代の幕開け、一人所帯の急増、低成長体制の到来は、教育、文化、福祉、交通などの諸側面で、住宅市場を都心の高層集合住宅へ集中させる公算が非常に大きい [全 2009:172-173]。

このように、これからも持続される「アパート全盛時代」を展望しつつ、同時に冒頭で言及した「田の畦アパート」と「畑の畦アパート」が雨後の筍のように出現している農漁村のフィールドの現実を迎え、これから韓国の民俗学は「普通の暮らし」をどのように問い、また「当たり前」の生活世界をいかに把握すべきなのか。アパートという開閉式日常の微視的現場と、共同体的連帯の多様な実践と試行錯誤をどのように対象化すればよいのか。今後その方法的糸口を見つけられることを願ってやまない。

注

- (1) 韓国全体の住宅の中で、アパートの比率は 2005 年に 52.7% となり、この年初めて半数を越えた。ソウル市の場合には 1985 年に 26.1% だったが、20 年後の 2005 年には 54.2% へ倍増する。詳しい内容は、ソウル市庁のソウル統計年報を参照のこと。
- (2) 現在まで高層集合住宅についての研究は、建築学や都市計画学、消費者住居学、住居環境学、不動産学などのような、応用科学や実用学問の側で主に行われてきた。だからなのか、「時代精神や社会意識に大部分は無関心なまま『非省察的な経験的研究』に埋没されている傾向」が強く、結果的に「行政の需要や資本の論理に容易に安住してきた側面までもあった」[田 2009:30]。本稿では、都市景観を中心にソウルの「アパート共和国」を分析したフランスの地理学者バレリ・ジュレゾ (Valérie Gelézeau)、「団地共和国」の団地化戦略を考察した朴寅碩、高層集合住宅を内視鏡と見なし、「アパート社会」の住居社会学を追求した田相仁、韓国近現代の住居社会史を克明に綴った田南一などの研究成果を主に参考した。
- (3) 康俊晩は、2005 年にある週刊誌のコラムで韓国社会を「アパート共和国」と命名しながら、それをミステリーとして見た。そして 2007 年には、バレリ・ジュレゾの博士学位論文が「アパート共和国」という多少煽情的な題名で翻訳、出版された。外国人が行ったこのアパート研究は、そのままマスコミの注目を浴び、以降「アパート共和国」はまたたくまに、韓国の住宅問題と都市問題を象徴する言葉となってしまった。高層集合住宅に対する韓国人の憧憬と欲望および嫉視と非難、自嘲などを含蓄した流行語になったのである。
- (4) 統計庁の 2006 年不定期調査結果によると、アパート居住者の平均総財産が 4 億 88 万ウォンで、単独住宅の場合の 2 億 722 万、連立および多世帯住宅の場合の 1 億 4,658 万ウォンを 2~3 倍凌駕している。詳しい内容は、国家統計ポータル「住宅種類別資産現況」を参照。
- (5) 2006 年、政府が不動産価格に泡が多発に起こった目をつけた 7 つの地域。家価格の急騰に牽引車の役割をしたソウル市の江南三区（江南区、瑞草区、松坡区）と陽川区木洞、そして京畿道の益塘、坪村新都市と龍仁市をいう。
- (6) 政府の 2005 年住宅重要調査によれば、韓国の平均居住期間は、アパートが多い都市地域であるほど短いものとして表れる。ソウルが 5.4 年、京畿道が 6 年、仁川が 6.8 年なのに比べ、地方都市は 9.9 年、郡単位の地域は 15.7 年だ。
- (7) 都市型韓屋の核心は内庭だ。住宅の真ん中に内庭があり、他のすべての部屋がㄷ字、あるいはロ字型に内庭を囲み、かつ内庭へ開かれる空間構成を持っている。ソウルの観光地として有名な北村韓屋マウルの家々がその良い例だ。
- (8) アパート団地内に、コミュニティー施設として「勉強室」を設置したり、団地の周囲に私設の「読書室」が多いのも、これと無関係ではない。
- (9) アパートの、台所に付いている小さな空間として、洗濯機を置いたり、その他多様な用途で使用することができる。大抵、この多用途室は暖房がついておらず、室外用スリッパを履いて入っている。

参考文献

康俊晩, 「아파트 共和国의 미스터리」, 『한겨레 21』, 2005.12.21.

康仁鎭 他, 「우리나라 住居形式으로서 아파트의 一般化 要因分析」, 『大韓建築学会論文集』, 13-9, 大韓建築学会, 1997.

- 金鐘憲, 「韓屋空間의 文化政治学」, 『湖南文化研究』, 湖南文化研究所, 2005.
- 南根祐, 「穀靈崇拜思想」, 『韓國의 民俗思想』, 集文堂, 1996.
- 大韓住宅公社 編, 『住宅都市40年』, 大韓住宅公社, 2002.
- 朴寅碩, 『아파트 韓國社会 - 团地 共和国에 간한 都市와 日常-』, 玄岩社, 2013.
- 발레리 줄레조(Valérie Gelézeau), 『韓國의 아파트研究 - 서울지역 7개 아파트단지 景觀 分析을 중심으로-』, 高麗大 学校 出版部, 2004.
- 발레리 줄레조(Valérie Gelézeau), 『아파트공화국』, 후마니타스, 2007.
- 서윤영, 『우리가 살아온 집, 우리가 살아갈 집』, 歷史批評社, 2007.
- 林瑞煥, 『住宅政策 半世紀 - 政治經濟環境 变化와 住宅政策의 展開過程 -』, 기문당, 2005.
- 田南一, 「韓國 住居 内部空間의 近代化 要素에 関한 研究」, 『韓国家庭管理学会誌』, 20-4, 2002.
- 田南一 他, 『韓國住居의 社会史』, 돌베개, 2008.
- 全寅權, 『男子의 誕生』, 푸른숲, 2003.
- 全相仁, 『아파트에 미치다 - 現代韓國의 住居社会学 -』, 이숲, 2009.
- 咸翰姬, 『부역의 文化史』, 살림, 2005.